

長澤榮治先生との40年

杉田英明

1

古い手帖を取り出してみると、長澤先生に最初にお目にかかったのは1979年、先生がアジア経済研究所に勤務し始めて数年目、私が大学院修士課程1年生のときだったようだ。当時長澤先生——その頃は「長澤さん」とお呼びしていた記憶があるので、ここでもしばらく「長澤氏」と表記させていただこう——はアジア経済研究所の委嘱で東京外国語大学アラビア語学科の奴田原睦明教授ぬたはらのむつきにアラビア語の個人授業を受けられ、私もその後しばらくしてアラビア語学科の授業に参加させていただいたので、関心領域が重なるかもしれないと考えた奴田原先生が当時東武東上線の志木しきにあったご自宅に一夜、私たちを招いて引き合わせて下さったのである。

当日は奴田原先生がさまざまな資料やエジプトの田園地帯のスライドを見せて下さったはずなのだが、私にはその内容がほとんど記憶に残っていない。というのも、長澤氏が持参された故郷信州の強い地酒を断わり切れずにほんのちょっと舐めたところ、それが効いて朦朧となってしまう、私はその場に坐り続けているのがやっとだったからである。それに引き換え、長澤氏は平然と日本酒を飲み続けているので、とにかくお酒好き、酒豪という印象がいつまでも残ることになった。

それから2年後の1981年2月に長澤氏はアジア経済研究所からの派遣という形でカイロに赴かれ、たまたま私も約半年遅れて同じ場所に留学することになった。出かける前に手紙をお出しすると折り返し返信が二通あり、その二通目に「近くに新しい郵便局ができたのでまた書き始めています」と記されていたのだが、のちに私自身がその同じモハンデスィーン地区の郵便局——と言っても、がらんどうの部屋に形ばかりのカウンターが置いてあるだけの簡素な小屋——を頻繁に利用することになるうとは、勿論そのときは思いもしなかった。実は、当初はカイロの地理がよく判っておらず、いくつか探した末に決めた場所が偶然、長澤邸——確か住居表示に「ヴィラ」という名前のついた、「邸」と呼ぶのがふさわしい戸建て住居の一階——のすぐ近くであることに気づいたのは、迂闊にも居住してしばらく経ってからのことだった。しかしそのお蔭で、至近距離にある長澤邸へは頻繁にお邪魔し、駆け込み寺宜しく、留学生生活をさまざまな面で助けてい

ただくことになった。長澤邸で雇っていたサバーフさんという小柄なかわいらしい(靴屋の旦那さんと小さな子供がいるという)お手伝いさんを紹介していただき、長澤邸での仕事のあと私のところにも立ち寄って部屋の掃除を手伝ってもらったのはそのほんの一例である。

当時はエジプトと日本のあいだは通信手段が今ほど発達しておらず、カイロでは日本語に接する機会がほとんどなかったので、長澤邸は——一年遅れで同じアジア経済研究所から赴任してこられた長田満江^{おさだ みつえ}氏の邸宅とともに——その情報不足を補ってくれる宝庫であった。その書棚には、西村寿行の『君よ憤怒の河を渉れ』や『われは幻に棲む』に始まって柴田翔『われら戦友たち』、小林信彦『大統領の密使』へと至る文庫本、それに『のり松太郎』『ゴルゴ13』『裂けた旅券』『かりあげクン』などのコミックスまで揃っていて、ここで借り出さなければ一生無縁だったかもしれないさまざまな作品に接する機会を得たのは貴重な体験である。植田まさし作『かりあげクン』のなかで「きょうび(今日日)」という日本語表現を初めて知ったと申し上げたところ、呆れられ面白がられて、それからしばらくのあいだ、いただく手紙——私のところには電話がなかったので、連絡には直接来訪され、不在ならドアのあいだに手紙やメモを挟んでおいて下さった——にはわざわざ「今日日^{きょうび}」とルビ付きでこの言葉が使われていた(のちに『日本国語大辞典』を調べたところ、徳川時代から用例のあるそれなりに由緒正しい言葉だったらしい)。また、研究所のお仕事の関係上、定期講読の新聞も日本から数日遅れで届いていたので、一か月ごとに溜まった古新聞を譲り受け、少しずつ目を通しては情報を更新することができたのも有難かった。カイロ在留の日本人研究者や留学生がときどき長澤邸や長田邸に集まり、奮発して近くのホテルの売店で大きなカップのアイスクリームやショートケーキを買い込んできてパーティーを開くことがあったが、長澤氏はそれを見て「気持ち悪い」と言って本当に逃げ廻っていたのが今思い出してもひどくおかしい。酒にはお強い半面で、実は甘い物が大の苦手であることもこのとき判明したのだった。

ずっとあとで伺ったところでは、1983年6月のご帰国後、アジア経済研究所に戻ってからはしばらくして、長澤氏は奴田原教授から「老人を助けるとして」東京外国語大学に移るよう懇請されたというが、学部よりは研究所の方が慣れていることもあってか、このときは応諾されなかったらしい。同じ研究機関である東洋文化研究所に異動されたのは1995年のことで、以来地域文化研究専攻、2006年度からは教養学科地域研究学科・アジア科での授業も担当されるようになり、私などもさまざまな面で助けていただく機会が増えたのだった。とくに私の研究専念期間に、前期課程の「アラビア語(初級)」「アラビア語(中級)」の授業を二度に亘り代わってお引き受け下さったことは忘れがたい。

長澤先生はご自身の専門領域を「近代エジプト社会経済史」と規定されることが多いようだが、エジプトに関しては、同時代の体制内左派や反体制派知識人、あるいは歴史的・思想的にそれに連なる過去の人々の声に耳を傾けることを好まれたように見受けられる。これは、『現代エジプト論』(アジア経済研究所, 1979年3月)の著者であり、アジア経済研究所で同僚であった中岡三益氏^{さんえき}などとも共通する姿勢で、あるいはその影響を受けられたのかもしれない。この面での代表作としては、アフマド・サーディク・サアドとヘンリ・クリエルという二人の共産主義者に着目した『アラブ革命の遺産——エジプトのユダヤ系マルクス主義者とシオニズム』(平凡社, 2012年3月)を挙げることができる。同書の最後の章には、かつての共産主義運動の闘士ムスタファー・ティーバ氏との交友が温情の籠もった筆致で描き出されており、これを読むと、1981-83年のエジプト滞在当时、この人物を通して長澤先生がどのような形でエジプト左派知識人たちとの「人脈」を築いてゆかれたのかが手に取るようによく判る。

また、これと同時に力を入れられたのが、いわゆる「エジプト的性格」論の研究であろう。その成果は『エジプトの自画像——ナイルの思想と地域研究』(東洋文化研究所/平凡社, 2013年3月)にまとめられている。同書の前半は、言わば体制に叛旗を翻し、自宅で隠遁生活を送りつつ研究を続けた孤高にして清貧の地理学者、ガマール・ヒムダーンの大著『エジプトの個性』*Shakhṣīya Miṣr* (初刊は1967年, 改訂版全4冊は1980-84年刊行)の紹介と分析, 後半はご自身による現地の農村調査などに基づくヒムダーン理論の検証である。ここで長澤先生は、奴田原睦明著『エジプト人はどこにいるか』(第三書館, 1985年3月)が主題とした「エジプト的性格」*shakhṣīya miṣrīya* 論を受け継ぎつつ、「エジプトの性格」とは一線を劃する意味で“*shakhṣīya Miṣr*”という言葉をあえて「エジプトの個性」と訳し直し、ヒムダーンの主要著作を刊行したアラム・アル＝クトゥブ(書物の世界)書店の現社長ムハンマド・アシュラフ氏や、その生活を物心両面で支えた父親である先代社長時代からの古参社員フィクリー氏への聞き取りも踏まえつつ、アラビア語の巨冊4巻からなる膨大で難解な著作を読み解き、日本の読者への紹介を試みている。ここにも、左派知識人ヒムダーンへの著者の強い共感が窺われることは言うまでもない。アラム・アル＝クトゥブ書店はカイロ市内の中心部アブデル＝ハーレク・サルワト通りであって、私もその存在は認識していたのだが、刊行書目が私の関心領域とはかけ離れているため、いつも前を素通りするだけでおよそ足を踏み入れたことがなく、店主がヒムダーンと深い繋がりを持っていたことも本書で初めて教えられた。

これらに先立つ英文著書 *Modern Egypt through Japanese Eyes: A Study on Intellectual and Socio-Economic Aspects of Egyptian Nationalism* (Cairo: Merit Publishing House, 2009) は、旧知

の友人が経営するカイロの出版社からほぼ自費出版の形で上梓されたと伺っているが、これまで長年世話になったエジプトの友人たちへの感謝の意味を込めた研究報告書でもあり、こうした著作の完成に払われた労力を見ても長澤先生の義理がたさや誠実さがよく判る。

さらに、これらと並んで長澤先生のお仕事で忘れてはならないのが、パレスチナ問題への取り組みであろう。長澤先生は、イスラエル大使館の前での抗議行動といった表立った活動とは無縁だが、2010年からはパレスチナ人学生に奨学金を出して日本への留学を支援する「パレスチナ学生基金」の理事長を務め、奥様は対イスラエル不買・資本引き揚げ・制裁運動(BDS: Boycott, Divestment and Sanctions)に賛同されるなど、地味ではあってもきわめて重要な役割を演じておられる。パレスチナ人をはじめとする「届かぬ声を持つ」世界のムスリムへの思いは、「包囲された者たちの声」(『詩人会議』第48巻, 2010年1月)というエッセイによく現われている。

もう一つ、アラビストの故・高野^{あきひろ}晶弘氏との友情にも触れておきたい。高野氏は東京外国語大学のアラビア語学科卒業後、NHKに入局して海外向けアラビア語ラジオ放送(ラジオ・ジャパン)などを担当、その後、現代アラビア語・アラブ文学や映画・テレビなどの大衆文化の研究に専念するため退職、エジプトのノーベル賞作家ナギーブ・マフフーズの『蜃気楼』(第三書館, 1990年11月)など現代エジプト小説の翻訳を手がけると同時に現代アラビア語辞典の執筆に文字通り心血を注がれ、どこかガマル・ヒムダーンとも似た清貧と求道の生活を続けられた。長澤先生と同時期にエジプトに滞在されてお互いに信頼関係が結ばれ、私自身もいろいろとお世話になった恩人である。その高野氏が2004年6月に心筋梗塞で急逝されたあと、アラビア文字の字母28文字のうち第20番目(fā')の途中まで仕上げられたワープロ原稿が残された。その散逸を惜しんだ長澤先生は2007年3月、三省堂の協力を得、科学研究費補助金「アラブ世界の活字文化とメディア革命」の参考資料の形でこれを『高野版 現代アラビア語辞典』上下二巻として刊行、全国の主要図書館などに配布された。それと同時に、第20番目から最後の28番目(yā')の字母までの新たな執筆を企画され、多くのアラビストに協力を依頼してその原稿の取りまとめを続けてこられた。私も微力ながらお手伝いをさせていただいているのだが、辞書の執筆は一筋縄ではゆかず、作業は延々と続いて、長澤先生のご退職までに間に合わせるができず申し訳なく思っている。その高野氏への思いは、「二人のアラビスト」(『経友』第160号, 東京大学経友会, 2004年10月)——高野氏と並んで取り上げられたもう一人のアラビストは、多くの中東研究者から慕われ尊敬されていた元シリア大使の故・小高^{おだかまसानお}正直氏——によく尽くされている。

長澤先生は関心が幅広く包容力のある方なので、主に英語文献を用いたそのゼミには多くの学生が集まり、門下からは多様な分野の研究者が輩出している。またアジア経済研究所時代から多くの研究会を主宰し、内外の中東研究者と親しく交わり、2009-10年

には日本中東学会の会長という重責も果たされた。東洋文化研究所では「中東映画研究会」を実質的に運営され、毎回講師を招いてのアラブ・イラン・トルコなど中東地域の映画の上映・紹介を定期的に行なって、一般社会への研究成果の還元にも努めてこられた。そのような先生と地域文化研究専攻で20年以上に亘って仕事をご一緒させていただいたことを、私は生涯の幸福の一つに数えている。

3

冒頭でもちょっと触れたように、長澤先生の故郷は信州(山梨県南巨摩郡増補町〔現・富士川町〕)で、私も高校から大学院にかけて山登りの仲間と、四季を通じ何度も出かける機会があった土地である。たまたまカイロ時代にそのことをお話しすると、「都会の若者は怖さを知らないから平気で山に入ってゆく」というお父上の言葉を口にされたが、何となくそれ以来、長澤先生ご自身が私の危なっかしい行動をはらはらしながらずっと黙って見守っていて下さったように思う。また、これもカイロでのこと(手帖のメモによると1982年6月19日)、市内中心部のマドブリー書店で偶然お会いしたので、その日の晩にともに招かれていた会合への土産のワインを買うため、確かタラアト・ハルブ通りの外れにあったコプト教徒の経営する酒屋へと同道し、そこから同じバスで一旦帰宅するべく、ターミナルのあるタハリール広場まで、(途中茶店での休憩を含む)小一時間ほどの道のりを徒歩でご一緒させていただいたことがある。ラムセス通りという交通渋滞の激しい幹線道路とにぎやかなタラアト・ハルブ通りとのあいだに、シャンポリオン通りと呼ばれる舗装も行き届かない、寂れかけた静かな通りが併行して走っているので、それではこちらをゆきましようかということになり、砂埃のひどい夏の砂利道を長澤先生が左斜め前を先導する形でゆっくりと歩いてゆかれた。他の細部は忘却の彼方に消え去っているにも拘わらず、その映像だけはなぜかいつまでも脳裏に焼きついていて忘れられない。振り返ってみると、その後の研究においても長澤先生はいつも私の斜め左前を歩いて、道程を示して下さっていたのだと思う。私自身の中東関係の勉強においては、長澤先生ほど長く親しくしていただいた同世代の研究者は他に存在しない。今後また、あの日のように斜め左前方を歩き続け、導いて下さることを願うばかりである。